

## 2 福生市の景観特性と課題

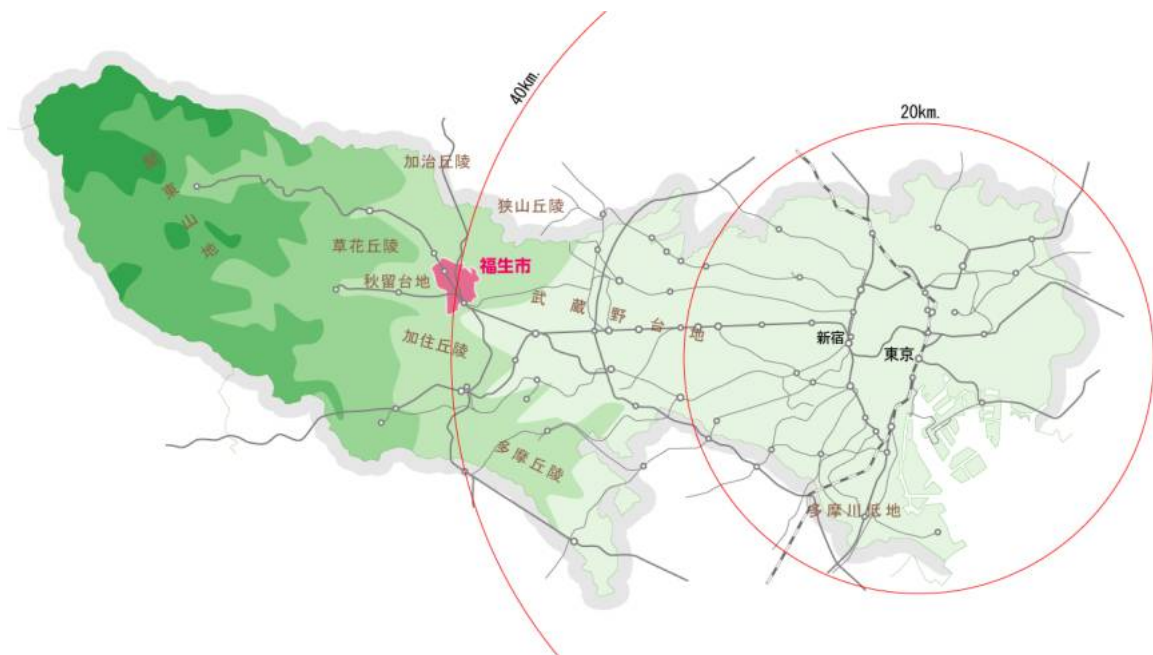
### (1) 福生市のようす

福生市の概況を景観の視点から整理すると、以下のような特徴がみられます。

#### ◆都心から 40km

福生市は東京都の多摩西部に位置し、都心から約 40km の通勤圏にあります。

福生市の位置



#### ◆成熟した都市

福生市は、早くから都市基盤の整備に取り組んできたことから、下水道整備率は 100% を達成しているなど、都市基盤はほぼ充足しています。

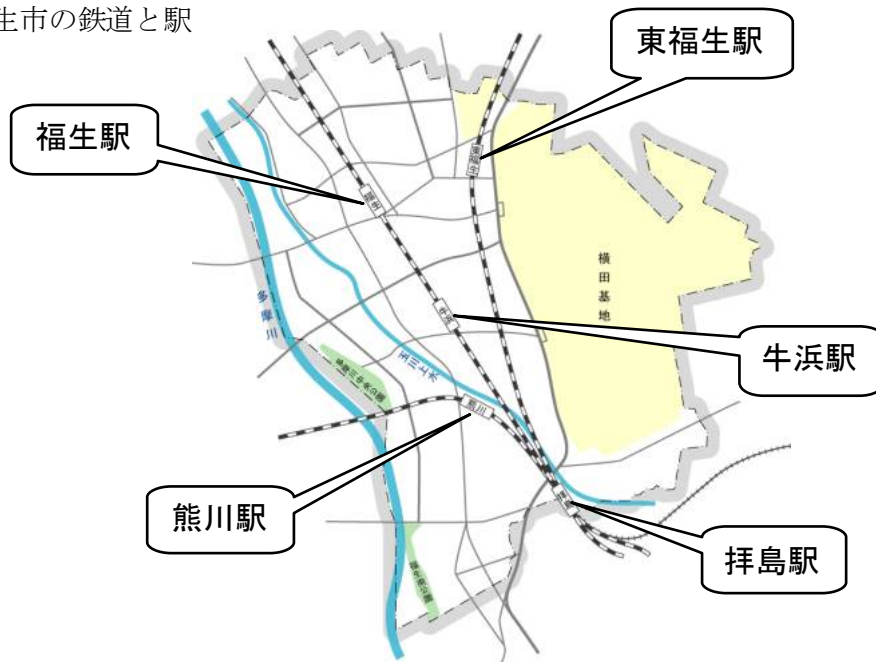
昭和 40 年代頃から東京のベッドタウンとして発展し、急激な人口増加をもたらしました。現在では住居系の用途が市域の大半を占め、人口密度のきわめて高いまちです。



### ◆5つの鉄道駅

鉄道はJ R青梅線、五日市線、八高線の3路線が通っており、5つの駅があります。市域面積は基地を除くと6.92k m<sup>2</sup>と都下で3番目に小さく、きわめて交通の利便性の高いまちを形成しています。

福生市の鉄道と駅



### ◆市域の1/3を占める横田基地

市域の1/3が米軍横田基地に利用されており、福生市は「基地のまち」としてのイメージも定着しています。国道16号沿いには個性的な店舗が立ち並び、近県からも来街者を集めています。



### ◆文化の発信基地

横田基地周辺には、1945年頃から米軍家族のために建設された「ハウス」が多数残っています。1960～70年代には著名な作家や芸術家を輩出し、文化の発信基地となりました。



### ◆市域の西端を縁取る多摩川

福生市の西側には多摩川の雄大な流れがあり、豊かな自然環境が広がっています。多摩川は、福生市にとって重要な「緑の軸」となっています。



### ◆市域を貫く玉川上水

江戸時代につくられた土木遺産である「玉川上水」が市域を南北に貫いており、上水からは2本の分水が引かれ、ゆたかな清流がまちをうるおしています。上水や分水沿いには、古くからの屋敷や樹林などが点在し、武蔵野の面影を今に伝えています。

玉川上水は、国の史跡に指定されています。



### ◆市域を南北に貫く2本の崖線

立川崖線、拝島崖線の2本の崖線が市域を南北に貫いています。多摩川同様、福生市にとって重要な「緑の軸」となっています。



◆崖線からしみ出す豊かな湧水

拝島崖線からしみ出す豊かな湧水を利用して、市内には江戸時代から続く2軒の造り酒屋があります。



◆ふっさ十景

市では、市民により選定された市内の魅力的な景観を「ふっさ十景」として選定しています。「桜並木と多摩川」、「南稻荷神社付近」、「熊川神社」、「みずくらいど公園」、「文化の森」、「国道沿いの商店街」、「柳山公園」、「神明社」、「玉川上水新堀橋付近」、「清岩院」が選ばれました。



桜並木と多摩川



南稻荷神社付近



熊川神社



みずくらいど公園



文化の森



国道沿いの商店街



柳山公園



神明社



玉川上水新堀橋付近



清岩院

## (2)福生市の景観特性

福生市は、多摩川がつくった河岸段丘の上にまちが形成されています。多摩川に向かって緩やかに続く段丘面の境には崖線が連なり、湧水や豊かな生態系がみられることが景観上の大きな特徴といえます。

また、福生市はいろいろな顔をもっています。多摩川、伝統的な民家や蔵、造り酒屋、玉川上水、2つの崖線、古くからの市街地、駅周辺の商店街、横田基地と国道16号周辺など、市内各所に多様な魅力が潜んでいます。

### 【福生市の特徴を表している代表的な景観】

- 福生駅東口の飲食店街、西口の銀座通りなど、まちなかの商業地の景観



- 横田基地、国道16号周辺など、国際的で個性的な雰囲気のある景観



- 福生市全域にわたってその西側を縁取る緑の帯である多摩川の景観



○崖線に沿って帯状に連なる緑の景観



○玉川上水、熊川分水、福生分水など、住宅の脇を水路が流れる景観



○伝統的な民家や蔵、造り酒屋など、かつてのたたずまい、歴史的な雰囲気が残る景観



○段丘を縦に横切り、多摩川－市街地－横田基地をつなぐ景観



など

福生市は、地形的、自然的、潜在的な特徴や、それによって形づくられる景観的なまとまりにより、大きくは以下の3つのゾーンに分けることができます。

【3つの景観ゾーン】

【街の手ゾーン】

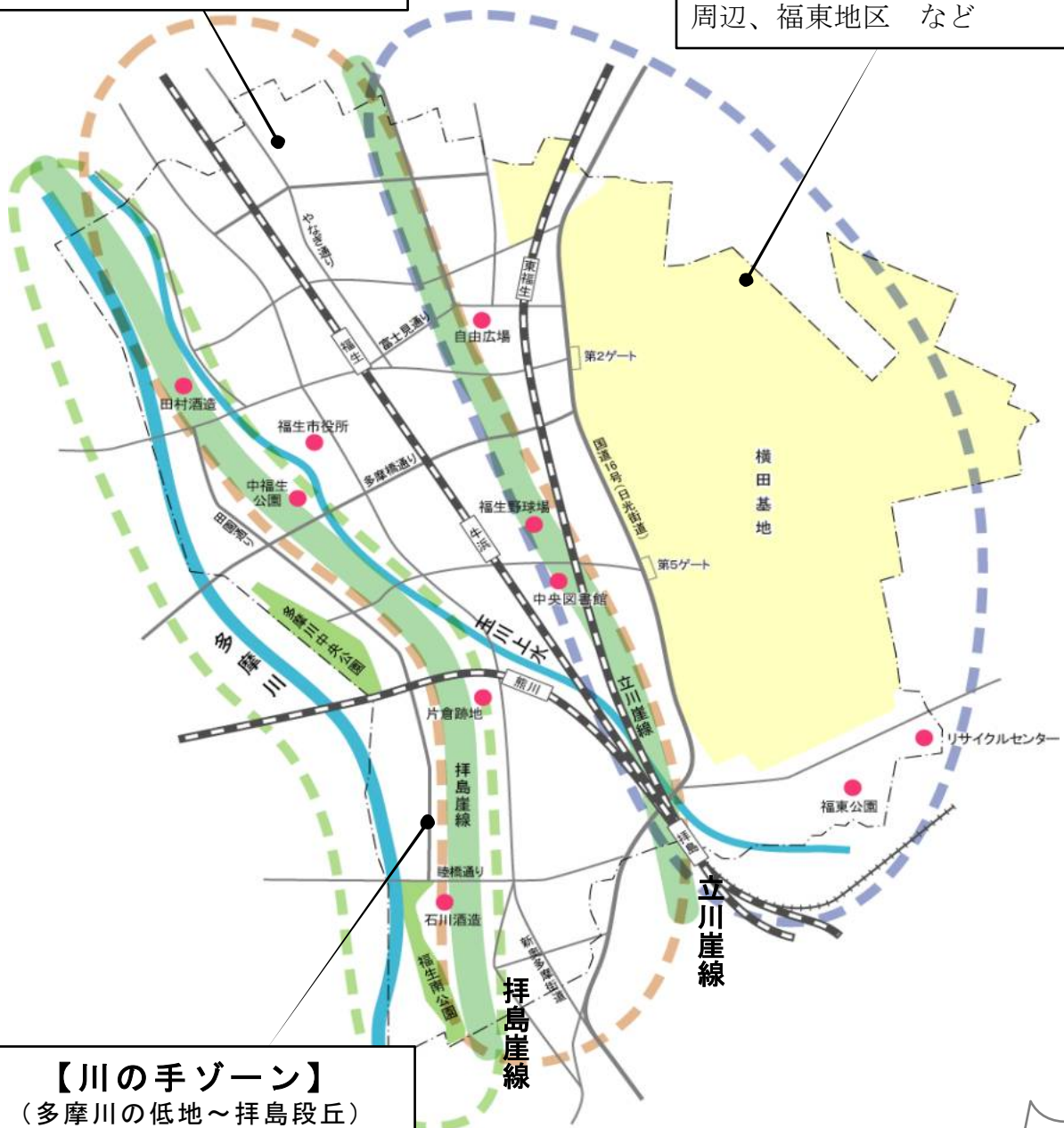
(拝島段丘)

古くからの市街地、福生駅周辺の商店街、青梅線沿線、市役所周辺、加美平団地 など

【丘の手ゾーン】

(立川段丘)

文化の森、横田基地・国道16号周辺、東福生駅周辺、産業道路周辺、福東地区 など



【川の手ゾーン】

(多摩川の低地～拝島段丘)

多摩川、河川緑地、伝統的な民家や蔵・造り酒屋等のある地域、玉川上水とその周辺緑地 など

### (3)福生市の景観づくりの課題

福生市の景観づくりの課題として、次のものがあげられます。

#### ◆いろいろな顔を活かした福生市ならではのオンリーワンの景観をつくる

：自然、歴史、文化、国際性、個性、混沌など、福生市はいろいろな顔を持っています。若者の憧れのまち「福生」と、自然と伝統文化の息づくまち「福生」が共存しており、この対照的とも思える文化の融合が福生市の重要な魅力の1つと言えます。異なる文化の交流や融合により、福生市ならではの個性あるまちなみをつくりだしていくことが課題となっています。



#### ◆子どもたちが成長する環境にふさわしい健全なイメージの景観をつくる

：市内には、ごみやタバコの投げ捨て、不法投棄、路上駐車、歩道上の駐輪、捨て看板等、まちの景観を阻害している様々な要因が見られます。

：景観は、子どもたちの成長とも大きく関係していると考えられますが、子どもたちは自分の住む環境や景観を選ぶことはできません。そのため、市民のルールやマナーの徹底を図るとともに、景観づくりを通して、犯罪の温床とならないまちづくりにつなげていくことが課題となっています。



#### ◆にぎわいのある商業地の景観をつくる

：中心市街地においては、空き店舗の増加による空洞化や、店舗を持たないマンションの進出等により、商店街の連担が失われつつあることが課題となっています。

：商店街においては、活気のある人波が源となり、すばらしいまちなみの形成につながっていくものと考えられます。まちの個性を活かした景観づくりを進めることにより、中心市街地ににぎわいを取り戻していくことが重要です。





### ◆まちのスケールや雰囲気にあわせた“まちなみづくり”を考える

: 福生市は住宅中心のまちであるため、住んでいる人が居心地のよいまちをつくる  
ことが重要です。しかし、建物のデザインや緑の配置は住み手の価値観に任され  
ている場合が多く、結果として統一感のないまちなみになっています。

: 景観を考えることは、住みよいまちをつくることにつながります。まちのスケ  
ールや雰囲気にあった、ゆるやかな統一感を生み出していくことが課題となってい  
ます。

: 工場や鉄道の施設などは、機能性はもちろん重要ですが、周囲の景観とのつながりや美しさに配慮したも  
のにしていくことも重要です。



### ◆視界に配慮した(視野が広い)まちなみをつくる

: すっきりとした青い空を眺めるためには、一定のルールのもと、電線類や広告物等の景観を邪魔する要素が適切に処理さ  
れているとともに、建物のスカイラインが揃っていること等  
が望まれます。

: 一方で、見た目だけでなく、より広い視点から判断することも必要です。電線類の地中化には、そのためにかかるコスト  
や廃材処理の問題もあり、それらも含めて総合的に考えるこ  
とが重要です。



### ◆水辺の原風景を思い起こせる環境や景観をつくる

: 福生市にとって、多摩川や玉川上水、熊川分水、福生分水等  
の水辺は、最大の財産の1つと言えます。かつてはホテルを  
捕りに玉川上水へ行ったり、熊川分水で水遊びをするなど、  
水路は子どもたちの遊び場でもありました。しかし、市街化  
が進むにつれて蓋がされ、今では市民の生活から遠いもの  
となっています。そのため、水とのふれあいの形を工夫し、水  
や生き物と親しめる水辺・楽しめる水辺を取り戻すことが課  
題となっています。



### ◆かつてのたたずまいを大切に景観づくりに活かす

: 福生市には、2つの造り酒屋、屋敷構えの残る古くからのお屋敷、養蚕の蔵、米軍ハウスなど、まちの歴史や文化を物語る資源が点在しています。これらは市の個性を表す重要な要素です。ある時代区分を設定して、その代表となる遺産を発掘し、更に磨きをかけていくなど、かつてのたたずまいを大切に、景観づくりに活かしていくことが課題となっています。



### ◆まちに緑のつながりをつくる

: 多摩川や玉川上水、崖線の緑は福生市の緑の骨格と言えます。これらに加え、鎮守の森、屋敷林、大木等を活かした緑の景観づくりが重要です。一方で、中心部やミニ開発の多い地域は必ずしも緑が豊かではなく、まち全体の緑を増やし、緑のつながりをつくっていくことが課題となっています。



: これからは、人間のことだけでなく、人と自然の共生を考えた景観づくりを行っていくことが必要です。自然から学び、自然を守り、自然を生かし、自然を利用し、自然の恩恵を受け、福生市の自然を次の世代に伝えていくことが求められています。

### ◆落ち着いたあるひろば感覚のみち、回遊できるみちをつくる

: これまでの道づくりは、車中心に考えられてきた面があります。市内には、歩行者にとって必ずしも歩きやすい道や、子どもや高齢者、車いす等にとって危険な箇所もみられます。住宅地の中においては、車中心から人中心に変えていくという視点が求められており、道端で自然に会話が生まれるようなみちづくりが望まれます。



: 市内には様々な資源が点在していますが、互いにつながっていないため、魅力を活かしきれいていません。本市ではいくつかの散策コースを設定していますが、そのルートは担当部署ごとに異なっており、案内サインも統一されていない状況にあります。今後は、市内に点在する魅力的な「点」を、誰もが安全に歩いてまわれるみちで有機的につなげて「線」にし、回遊性をつくりだしていくことが課題となっています。